

集

俳句フォーラム

2017年1月 第62号

白山句会

東京大神宮

田中藤穂

初紅葉黒き玉砂利つややかに
樽植えの稲が穂を垂れ大神宮
酒賜ふ菊の節句と知らず来し
切株の椅子にいたたく菊の酒
咲き残る百日紅や神籤棚

瑞穂の国

浦川哲子

盤上を逃げる王将小鳥来る
秋の蝉聴き分けている雨上り
楸邨忌古利根川に橋いくつ
稲を刈る瑞穂の国のすめらみこ
秋思かな与謝野晶子のみだれ髪

羽田空港

平野無石

離陸待つしばしの憩いソーダ水
離陸機の雲間に消ゆる残暑かな
離陸一機山の日過ぎし雲の色
初紅葉江戸まんなかの伊勢社
日を返す鰹木いくつつ秋の雲

秋暑し

都築繁子

秋暑し機影見送る旅心
秋団扇笑顔とともにいただきぬ
大神宮の酒樽ひそと昼の虫
神域の松の枝ぶり水の秋
涼新たな旅の話聞く夕べ

銀翼

植木やす子

浜日傘錆びし錨と女神像
夏帽子席に残して甲板へ
銀翼の消えゆく先や鰯雲
ゆるゆると翼向き換え夏空に
今日も無事外つ国に飛ぶ日盛を

今日の菊

工藤はる子

残暑お見舞い空港口ビーンにポスト二基
夏燕よぎるや羽田飛行場
柏手と水音絶えぬ今日の菊
秋風やふうわり通る修行僧
観音の足指覗く秋日和

潮の香

篠田純子

爆音の羽田に平和敗戦忌
秋暑し運河に残る疲れかな
陸にある碇包みて草茂る
夏木立とおして潮の香とどきけり
黒南風や開かぬ橋に年重ね

轟音

大山夏子

父の日の家族のかたち垣根越し
駈け出す兎追って真赤な蛇莓
捨て碇錆びし歳月夏草長け
機影発つ轟音残暑置き去りに
秋なれや神話の国も現世も



心のふるさと

平野 無石

生まれは東京の立川市であるが、昭和二十年に戦災を避け、秋田へ家族で疎開した。

青森との県境、現在の白神山地の秋田県側の入口の村である。父の故郷であり、祖母が二人の叔母と一緒に住んでいた。広い宅地と少々畑があり、これが戦後の食糧難を凌ぐのに役立った。五年間の疎開であったが、都会暮らしでは体験できないことばかりであった。

雪が降りだすと生活は一変する。囲炉裏を囲む生活が中心の長い冬が始まる。雪下しをすると二メートルの積雪が家を囲み、屋内は暗くなる。生活は厳しかったが、楽しい思い出もある。晩冬になると、積雪が固まり、固雪となる。広い田原の上で凧上げをするのだ。但し凧など売っていないから、自分達で作る。使えなくなつた番傘の骨で形を作り、それに学校で書いた習字の半紙を貼る。赤い二重丸、三重丸の習字凧が競うのは壯観であった。

雪解が始まると、早く土が見たいという気持が強くなり、残雪をスコップでよける。そうすると雪の下に露の臺がもう芽を出している。この発見も感激だった。雪が解けると、梅桜、李、杏が一斉に咲き出す。

そのあと田植が始まる。田植は村の一大行事である。田植の一週間は、小学校は休校となり、雨天体育館は臨時託児所となる。上級生は田植の手伝いに行くので、先生と下級生が子供の面倒を見る。子供と雨天体育館を走りながら、十時、三時のおやつをもらうのが楽しみだった。蕨やぜんまいの山菜とり、秋の茸とり、通草とりもあった。

農家には農耕用の馬や牛がおり、鶏も沢山飼われており、一番鶏、二番鶏の声も耳に残っている。

豊かな自然の中の農村で過した経験は、苦しいこともあったはずだが、みな美しい思い出である。

食物ではきりたんぼがある。ふだんは食べられないが、冠婚葬祭や特別の来客のときには、いつもきりたんぼがあった。私にとっては、贅沢なフランス料理や和食よりも、きりたんぼが最上の料理である。

わずか五年の田園生活ではあったが、これが私の心のふるさとである。